

故郷を逃れて

3・11から3カ月

⑤

蒸し暑いビニールハウスの中。慣れた手つきでプチトマトの枝落2回出向く。「体がな」としをこなす。「トマまっちまっちから」と作トは「うううう」と、うまくならねえんだ」。戸内沿岸の気候、風土がこぼれた。福島県浪江町から広島市南区に避難している高田秀光さん(59)。農家として5年前、長年勤めた広島県での定着を目指し、地元銀行を早期退職す。毎週末、県内の関し、再業農家となった。

5年前、長年勤めた広島県での定着を目指し、地元銀行を早期退職す。毎週末、県内の関し、再業農家となった。



ビニールハウス内で、森さんと農作物について話し合う高田さん

定住の模索 本業で恩返し 農場探す

係者を訪ね、条件に合 福島の第一原路の北西十た。手掛けた野菜は46 生えていた。だが、3 で、紹介された7、8 戻ってくるから」と告 う農場を探している。 数々の田畑約1・5畝 種類。「土もちょうど 月、震災と原発事故で 軒の農場を回ってほみ けるつもりでいる。 ひろしま福島県人会 で、減農薬やアイカモ いい具合になってき すべてを失った。 たが、なかなか条件面 の紹介で知り合った東 農法にこだわってきた」と農への自信も非 避難生活は一時的と て折り合わない。

考え、結婚して広島市 「いつまでも『避難 に住む長女を頼って3 民』でいるわけにはい 月21日に広島に来た。 かねえ。早く本来の仕 ところが、「警戒区域 事を取り戻したい」。 に指定」 「原路のメル 考えるほど夜眠れなく トタウン判明」。二 なり、5月中旬、体調 エースを讀むたび、古 を崩した。病院で胃潰 罪が還のく。「放射線 瘍と診断された。スト に汚染された土は簡単 レスが原因だった。 は帰れないだろう」と 一緒に避難生活を 送る妻英子さん(56)は 自らも体の不調を抱 えながら、「あまり思 い詰めでないで」と気遣 う。生活基盤を少しず つはり自然の中がいい 最近になって、交遊 へと進む物件もようや く出てきた。浪江町の 自宅には「一時帰宅」 する予定だ。そのとき には、住み慣れた故郷 と田畑に「いつか必ず 」。おわり